

## 編集後記

桜の花があわただしく散るころになると、そろそろ木簡研究のことを考えはじめなければ、と編集責任の委員と顔をみ合わせる事となり、五、六月で各執筆者へ依頼を終えて、まず一息。夏は編集の実務が進む。木々の紅葉が目につきはじめるころになると、幹事は秋の深まりとともに、自然の循環とは逆に、バタバタと気ぜわしくなる。師走の寒風が吹きはじめて、大会がおわると一応今年も無事、一件落着となる。

今年もこの分ではければ大会参加者には、当日、第四号をお届けできそうである。これは、まず執筆者をはじめ、御協力いただいた方方のおかげである。紙上を借りて、厚くお礼を申し上げたい。本誌も第四号になって、一応、会誌のスタイルも整った。編集の作業も、手順が次第にわかってきて、スムーズとは言えないまでも、一応、順調に進められるようになってきた。そして、本号についていうと、全国各地から寄せられた一九八一年出土木簡の記事は、質量ともに充実して、頁数も、八五頁を越えることとなった。これは、むしろ会員以外の各地方の発掘担当者・担当機関の積極的な、協力のたまものである。これに比べて、研究論文が二本しか掲載できなかった

のは、会員の研究活動を会誌に反映するという点で、いささか心残りが無いわけではない。それでも、会誌への投稿を総会で呼びかけ、投稿規定を作成した甲斐があつて小谷博泰氏からは貴重な労作を寄せていただいた。氏は、古代国語学を専攻され、すでに、木簡を使用した論文も、ものされておられる。今回の論稿も、木簡研究について新しい刺激を与えるものであるように思われる。また、和田萃氏の論稿は、四〇頁を越える雄編で、論文本数が二本と少なかったことをカバーして余りあるものとなっている。第三回研究会で発表されたものに、補充されて、ものされたものである。これまでの、氏の古代祭祀についての研究の一端を示されたものである。呪符という難解な史料を整理、検討された力作といえよう。

また、一九七七年以前の出土木簡については、一九六六年までのものを収載した。しかし、それ以前のものでも、去年から懸案になっている、下曽我遺跡などをはじめとして、今後とも内容を充実させていく必要がある。

その他、木簡についての著書・報告書等の紹介、書評なども会誌に載せたいと心懸けてはいる。しかし、結局、今年も充分なことはできなかったように思う。これらの点を含めて、今後とも会員諸兄姉の御協力を切に願いたい。

(鬼頭清明)